

P-97 B群溶連菌のnew serotype (JM9型、NT6型) 別による臨床的意義の検討

山形県立河北病院

小田 隆晴, 吉田 雅人, 小川比呂志,
木村 和彦, 大野 勉

【目的】産科・婦人科感染症で分離されたB群溶連菌(GBS)の菌株についてWHOのserotypeに併せてJM9型、NT6型のnew serotypeも同定し、型別の分離頻度、薬剤耐性、病原性、予後につきその臨床的意義を検討した。【方法】対象は産科婦人科感染症でGBSが検出された115症例(妊婦45例、非妊婦70例)、生後amnion infection typeの敗血症であった新生児6例である。GBSのserotypeの同定はGBS型別免疫血清「生研」を使用し、I～V型、JM9型、NT6型を判定した。GBS陽性妊婦に対してはPPIC点滴静注を第1選択剤として治療しその後のCAM、PROM、産道感染、垂直感染の有無を検討した。非妊婦には腭洗浄または抗菌剤で治療し、その予後を検討した。

【成績】妊婦のGBS serotypeはNT6型31.3%、JM9型28.1%、Ⅲ型15.6%の頻度で同定され、JM9型の2例ではCAM、PROMを発症し早産に至った。新生児のserotypeはJM9型が3例、NT6型が2例、Ⅲ型が1例であり、Ⅲ型を除いたものは全て垂直感染例であった。非妊婦のGBS serotypeは、JM9型が34.3%と最も高く、NT6型31.4%、Ⅲ型17.1%であり、JM9型、NT6型は子宮頸管炎のみならず子宮内膜炎を示すものが多く認められた。またこれらの感染者には未婚者や高年婦人が比較的多く、混合感染率も40%と高率に認められた。GBS菌株のserotypeの薬剤耐性はJM9型、NT6型でPC、セフェム系に耐性を示すものが20%に認められた。【結論】以上の成績より、産科のみならず婦人科領域の感染症においても、GBS検出例に対してJM9型やNT6型のnew serotypeを含めた分析が病態ならびに予後判定に有用であることが示唆された。

P-98 Ligase Chain Reaction (LCR)法による女性性器*C. trachomatis*感染の検出

愛知医大

保條説彦, 岡本俊充, 野口靖之, 内田 聡,
佐藤英子, 野口昌良, 中西正美

【目的】近年、産婦人科感染症領域において遺伝子診断法が頻用されるようになったが、その検査手技の煩雑さやcontaminationの問題から、未だ十分な普及には至っていない。そこで今回我々は、より簡便で、より高感度な、新しく開発されたligase chain reaction (LCR)法を用い、*C. trachomatis*を検出し、既存の遺伝子診断法との比較を行い有用性を検討した。

【方法】性器感染症が疑われた74例を対象とし、swabによる子宮頸管擦過検体をLCR法、PCR法、DNA probe法それぞれの比較を行うと同時に、尿検体については、LCR法、PCR法の2者で比較検討を行った。

【成績】swab検体において*C. trachomatis*がLCR法陽性は6/74 (8.1%)、DNA probeでは4/70 (5.7%)、PCRでは8/67 (11.9%)であった。swab検体においてLCRとDNA probeとの比較では、2例にLCRでのみ陽性が認められ、DNA probeのみ陽性の検体は存在しなかった。PCRとの比較においては、PCR陽性でLCR陰性である3例の不一致例が存在したが、3例いずれもPCRのOD値はCut off値に近い値のため、検査手技上のcontaminationの可能性が示唆された。尿検体における検索では、LCRとPCRの一致率は100%であったが、LCRにおいて、swabで陽性であるにもかかわらず尿検体で陰性例が存在した。

【結論】LCR法は、DNA probe法と比較し、*C. trachomatis*検出に優れ、PCR法とほぼ同等の感度があると思われた。また、性器感染症の診断において女性尿検体は主たる感染部位である子宮頸管からの採取検体ではないため、LCR、PCRともに検出不能な例が存在し、尿検体のみでの*C. trachomatis*女性性器感染症の検索には今後の検討の余地があると思われた。